Title	親子間における養育態度の認知差(I)
Author	村尾, 能成 / 南外, 栖枝
Citation	大阪市立大学家政学部紀要. 12 巻, p.85-92.
Issue Date	1965-02
ISSN	0473-4742
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学家政学部
Description	

Placed on: 大阪市立大学学術機関リポジトリ

Placed on: Osaka City University Repository

親子間における養育態度の認知差（I）

村尾能成・南外栖枝

Difference in Perception of Matternal Attitude betweeen Mothers and Their Children (1)

BY YOSHINARI MURAO AND NARAE NANGAI

目　　的

親の養育態度が子供の人格特性の形成に与える影響性については多数の研究があるが，他方，親の態度それ自身よりも，その態度を子供がどのように認知しているかが重要であるとも考えられる。[1,5,6,7] 本編はこの点に関連して，親子の養育態度の認知の差異と両者の性格との関係を吟味せんとした研究の一部で，認知の差異を主としたものである。

手続及び方法

I　**養育態度の調査**　親が自認する養育態度及び，子の認知する親の養育態度については，藤原[2]の質問紙を同内容異文章にしたもので，10の生活領域における養育態度の認知を，親と子に同一内容のものをそれぞれ質問形式を変えて実施した。子供に対しては，各学校，集団で実施し，小学生に対しては各問ごと読み上げ，質疑応答の後記入せしめた。親には家庭に於て記入，児童を通じて回収した。（回収率96%）

II　**調査対象**　大阪市東北部の住宅地，高店街の多い地域，生活程度は中の上げ大多数の地区の小・中・高校生とその母親を対象とし児童は昭和38年10月中旬より下旬の間に各教室で実施，母親の実施，回収も同期間に行った。調査人員は第1表の通り。

第1表　調　査　対　象

学年	小学5年		中学2年		高校2年		合計
対象／性別	男	女	男	女	男	女	
児童・生徒	44	44	44	44	27	66	269
母親	44	44	44	44	27	66	269

註　親子どちらか一方回収不能のもの，母が養育にあたっていないものは除外した。

結　果　と　考　察

Ⅰ　認知の差異の発達差　各生活領域ごとの親と子の認知の一致，不一致は第2表の通りである。

第2表　認知の一致，不一致（学年別，領域別）

学年	小学5年			中学2年			高校2年		
生活領域	一致	不一致	x^2－検定	一致	不一致	x^2－検定	一致	不一致	x^2－検定
将来	52(46)	48(42)	x^2= 0.18	75(65)	25(22)	x^2=21.25**	79(70)	21(9)	x^2=29.22**
勉強	69(60)	31(27)	x^2=12.52**	63(53)	37(31)	x^2= 5.76*	69(48)	31(22)	x^2= 9.64**
友人	66(57)	34(29)	x^2= 9.12**	73(64)	27(24)	x^2=18.16**	65(54)	35(29)	x^2= 7.35*
趣味	59(50)	41(35)	x^2= 2.64	55(47)	45(38)	x^2= 0.95	54(45)	46(39)	x^2= 0.43
遊び	47(39)	53(44)	x^2= 0.30	52(45)	48(42)	x^2= 0.10	56(37)	44(29)	x^2= 0.97
手伝い	38(33)	62(54)	x^2= 5.07*	46(37)	54(45)	x^2= 0.98	48(35)	52(38)	x^2= 0.12
衛生習慣	45(39)	55(48)	x^2= 0.93	45(39)	55(45)	x^2= 0.43	51(39)	49(37)	x^2= 0.05
礼儀	44(39)	56(49)	x^2= 1.14	43(38)	57(48)	x^2= 1.16	45(39)	55(48)	x^2= 0.93
読書	56(49)	44(38)	x^2= 1.39	46(40)	54(47)	x^2= 0.56	51(42)	49(41)	x^2= 0.01
小遣	51(45)	49(43)	x^2= 0.05	58(48)	42(35)	x^2= 2.04	58(45)	42(33)	x^2= 1.85

各数字は%，（　）内は頻数，　*は5%以下，　**は1%以下の危険率で有意。無答を除外したので，各領域により調査人員に差がある。

小学生の手伝いの領域をのぞき，有意な領域はいずれも一致の方に高い傾向がみられた。

また発達的に増加の傾向がみられるが（第3表），有意な差は認められない。各生活領域ごとの一致，不一致の発達的な差は（第4表），将来の領域のみが有意であり，学年とともに一致の傾向がみられる。このような傾向は以上の各結果に於てもみられるが，高学年となるとともに，将来の計画のことは親子間に於て，積極的なものになり両者の話し会いがあり，考えや態度の類似度が高まるためと考えられる。

第3表　全領域・学年別の一致，不一致（%）

学年	一致	不一致	計
小・5	53	47	100
中・2	56	44	100
高・2	58	42	100

第4表　一致，不一致の発達差（%）

生活領域	将来		勉強		友人		趣味		遊び		手伝		衛生習慣		礼儀		読書		小遣	
学年	一致	不一	一致	不一	一致	不一	一致	不一	一致	不一	一致	不一	一致	不一	一致	不一	一致	不一	一致	不一
小・5	52	48	69	31	66	34	59	41	47	53	38	62	45	55	44	56	56	44	51	49
中・2	75	25	63	37	73	27	55	45	52	48	46	54	45	55	43	57	46	54	58	42
高・2	79	21	69	31	65	35	54	46	56	44	48	52	51	49	45	55	51	49	58	42
x^2-検定	x^2=16.63**		x^2=0.72		x^2=1.54		x^2=0.76		x^2=0.94		x^2=1.69		x^2=0.25		x^2=0.26		x^2=2.06		x^2=0.99	

Ⅱ　親の養育態度の親子間の認知差　養育態度（4型）別の，各生活領域ごとの一致は第5表の通りで，民主的態度で各生活領域の一致傾向が強く，低学年ほどこの傾向がみられる。他方，放任的，

専制的態度を示す親が領域によっては増加する傾向がみられる。不一致については，4つの養育態度の型の間で12の不一致がみられるがこれを3群に分ける（第6表）Ⓐ 親子間の認知がともに望ましくない態度の型で不一致 Ⓑ 親の認知する態度が望ましくない型，子の認知する態度が望ましい型で不一致，Ⓒ Ⓑの逆の場合の3つである。

第5表　4つの食育態度における一致の傾向（%）

生活領域＼学年＼態度	放任			溺愛			専制			民主		
	小5	中2	高2	小5	中2	高2	小5	中2	高3	小5	中2	高2
将来	0	0	1	4	12	14	4	5	3	92	83	82
勉強	0	11	15	0	0	0	7	4	0	93	85	85
友人	7	19	9	0	0	0	2	2	2	91	79	89
趣味	8	17	11	0	11	2	0	0	2	92	72	85
遊び	3	7	5	5	4	3	15	20	5	77	69	87
手伝い	9	11	23	3	3	9	21	16	26	67	70	42
衛生習慣	0	15	38	0	0	1	26	31	5	74	54	56
礼儀	5	0	8	18	24	3	15	45	36	62	31	53
読書	8	45	55	2	5	10	0	5	0	90	45	45
小遣	0	5	18	4	4	13	9	10	7	87	81	62

数字は，領域別，学年別の百分率。

第6表　養育態度に対する親子間の認知差（歩数）

生活領域＼学年＼Ⓐ＼Ⓑ＼群別		A						B			C		
	Ⓐ	放任		溺愛		専制		放任	溺愛	専制	民主		
	Ⓑ	溺愛	専制	放任	専制	放任	溺愛	民主			放任	溺愛	専制
将来	小5	0	0	0	1	0	0	0	3	0	3	20	15
	中2	0	0	0	0	0	0	0	6	0	3	8	5
	高2	1	0	0	0	0	0	0	4	0	5	8	1
勉強	小5	0	2	0	0	1	0	1	0	9	3	1	10
	事2	0	0	0	0	1	0	8	0	2	7	0	14
	高3	0	0	0	0	1	0	2	1	1	14	0	4
友人	小5	0	1	1	0	0	0	1	1	4	11	3	6
	中2	0	1	1	0	1	0	1	1	0	14	1	1
	高2	0	0	0	0	2	0	1	0	2	20	0	4
趣味	小5	1	2	0	0	1	1	6	1	5	6	9	3
	中2	3	0	0	1	0	0	6	5	2	10	13	3
	高2	5	1	1	0	0	0	2	2	0	19	7	0
遊び	小5	1	1	1	1	0	3	2	2	6	5	6	16
	中2	1	0	2	2	2	3	6	2	7	11	4	4
	高2	0	1	1	0	2	1	3	1	5	10	0	5
手伝い	小5	1	1	2	3	17	4	2	3	15	2	2	2
	中2	2	4	2	0	12	0	3	3	13	7	2	3
	高2	3	0	2	0	6	5	0	2	8	7	5	0

衛生習慣	小5	3	1	1	0	2	3	1	2	14	9	7	5
	中2	1	2	1	2	7	2	0	2	8	12	6	7
	高2	0	0	3	1	6	0	0	0	6	12	0	7
礼　儀	小5	1	1	1	5	1	5	0	6	8	3	9	9
	中2	3	1	0	4	1	4	2	2	2	4	13	15
	高2	1	2	1	2	1	8	0	2	2	5	16	8
読　書	小5	2	1	5	0	0	0	4	0	2	16	5	3
	中2	1	0	2	0	1	1	2	0	0	29	9	3
	高2	1	0	9	0	1	0	0	0	0	22	6	2
小　遣	小5	0	1	0	0	1	4	0	4	10	8	4	11
	中2	2	0	1	0	0	0	0	1	6	13	4	11
	高2	0	0	1	0	0	0	0	1	3	14	9	4

註　Ⓐ 母の自認する態度　　Ⓑ 子からみた母の態度

C群に不一致が高い。親の躾態度を評価する場合，躾を受ける側は与える側より厳しく，不合理なものとみ，親は自分のやり方を一層合理化して考える傾向があるとも考えられる。(4.8)

一致・不一致の差の認みられる「将来」において，ズレの傾向は殆んどC群にある。学年とともに親の民主的態度を放任的ととる傾向がふえ，溺愛・専制的ととる傾向が減少している。子供の成長とともに，親の子に対する接触の機会，養育行動の減少や自主性尊重など親の民主的態度から子は親の態度を放任ととりやすい一方，親の態度に対する理解の増加が民主的態度を溺愛・専制的とはとらず正当に評価するようになるという二方向の発達が考えられる。

Ⅲ　認知差についての子供の性差　各生活領域ごとの子供の男女別の認知差は第7表の通りで，有意な共通の領域は将来，友人のみであった。全領域についての一致・不一致の差は第8表の通りで，有意差（$x^2=28.12^{**}$）が認められた。全体として女子の方に一致が多く，男子は半数以上が不一致の傾向を示した。各領域ごとの認知差は第9表の通りで，有意差の認められた生活領域で，女子の一致傾向が高い。男子においても，将来，勉強の2領域では一致の方が多い

第7表　一致，不一致の比較

性別	男			女		
生活領域	一致	不一致	x^2-検定	一致	不一致	x^2-検定
将　来	60(68)	40(46)	$x^2=4.25^{*}$	75(113)	25(37)	$x^2=38.51^{**}$
勉　強	55(59)	45(48)	$x^2=1.13$	76(102)	24(32)	$x^2=36.57^{**}$
友　人	64(71)	36(40)	$x^2=8.65^{**}$	71(104)	29(43)	$x^2=26.33^{**}$
趣　味	43(46)	57(62)	$x^2=2.37$	66(96)	34(50)	$x^2=14.49^{**}$
遊　び	46(47)	54(56)	$x^2=0.75$	56(74)	44(59)	$x^2=1.69$
手伝い	31(33)	69(73)	$x^2=15.09^{**}$	53(72)	47(64)	$x^2=0.47$
衛生習慣	47(50)	53(56)	$x^2=0.34$	48(67)	52(74)	$x^2=0.35$
礼　儀	39(44)	61(68)	$x=5.14^{*}$	48(72)	52(77)	$x^2=0.17$
読　書	46(50)	54(58)	$x^2=0.59$	54(81)	46(68)	$x^2=1.13$
小　遣	43(47)	57(63)	$x^2=2.32$	65(91)	35(48)	$x^2=13.30^{**}$

各数字は％，　（　）内は頻数

第8表　全領域の一致，不一致（%）

性別＼項目	一　致	不一致	計
男	47	53	100
女	61	39	100

が，女子より低い。以上の結果は認知差に性差のあることを示すが，女子は男子より母親との認知のずれが低い。母親と女子の親子関係における特質を示すと考えられる。男子に比し女子の母子関係が，家事という仕事を通じて緊密であり，依存的な関係の中で，役割の学習，母への同一化が行われ，考え方や態度の類似が形成され易いと考えら

第9表　領域別，一致，不一致の性差（%）

生活領域	将　来		勉　強		友　人		趣　味		遊　び		手伝い		衛生習慣		礼　儀		読　書		小　遣	
性別	一致	不一	一致	不一	一致	不一	一致	不一	一致	不一	一致	不一	一致	不一	一致	不一	一致	不一	一致	不一
男	60	40	55	45	64	36	43	57	46	54	31	69	47	53	39	61	46	54	43	57
女	75	25	76	24	71	29	66	34	56	44	53	47	48	52	48	52	54	46	65	35
x^2 検定	$x^2=7.39^{**}$		$x^2=11.8$		$x^2=2.31$		$x^2=13.72^{**}$		$x^2=2.36$		$x^2=11.62^{**}$		$x^2=0.25$		$x^2=2.09$		$x^2=1.54$		$x^2=12.95^{**}$	

第10表　4つの養育態度にをける一致の性別百分率

生活領域＼性別＼態度	放　任		溺　愛		専　制		民　主	
	男	女	男	女	男	女	男	女
将　来	0	1	9	12	4	4	87	83
勉　強	8	8	0	0	7	2	85	90
友　人	14	11	0	0	1	2	85	87
趣　味	11	13	0	6	2	0	87	81
遊　び	9	4	6	3	17	12	68	81
手伝い	12	15	0	7	33	15	55	63
衛生習慣	18	18	0	1	30	15	52	66
礼　儀	7	3	20	28	36	29	37	40
読　書	24	41	4	6	2	1	70	52
小　遣	4	10	9	7	13	7	74	76

れる。[6] 性差の認められる5つの生活領域の各々については，親のとる養育態度に性差は認められない（第10表）。全領域について，性別と養育態度の間には有意差（$x^2=11.603^{*}$）が認められ，有意な5領域にも性差（$x^2=8.74^{*}$）が認められるが，男女ともに民主的態度の認知で高い一致を示している。一致，不一致の性差のみられた5生活領域の不一致は第11表の通りで，12の型の不一致には性差が認められるが（$x^2=21.54^{**}$），3群のズレの中で，男女ともCの不一致が高く次いでBのズレとなっている。親に対して好ましい態度をもつ子供は，親の専制的，放任的態度を好ましきものと受容し，否定的態度をとる子供は親の態度の型にかかわりなく，それらを否認する傾向があるといわれるが[3]，上記の結果にも同様な傾向がみられる。5つの生活領域それぞれのズレの傾向には性差はみられなかった。

Ⅳ　養育態度認知の一致程度　各生活領域の一致の場面を得点化（10場面，0から10点）し，また

第11表　養育態度に対する親子間の認知差（男女別）

生活領域	性別	A						B			C		
	Ⓐ	放任		溺愛		専制		放任	溺愛	専制	民主		
	Ⓑ	溺愛	専制	放任	専制	放任	溺愛	民主			放任	溺愛	専制
将来	男	1	0	0	0	0	0	1	4	0	8	15	16
	女	0	0	0	0	0	0	0	8	0	3	21	5
勉強	男	0	1(2)	0	0	1(2)	0	7(15)	0	4(8)	14(29)	1(2)	20(42)
	女	0	1(3)	0	0	2(6)	0	3(9)	0	8(25)	10(31)	0	8(25)
趣味	男	6	1	0	1	1	0	6	4	5	18	14	6
	女	3	2	1	0	0	3	7	6	2	17	14	0
手伝い	男	5	4	4	3	16	4	2	2	15	9	6	3
	女	1	1	2	0	18	5	3	5	18	7	3	2
小遣	男	1	0	2	0	1	2	0	2	14	19	11	11
	女	0	1	0	0	0	2	0	4	5	15	5	13

数値は頻数，（　）内%　　Ⓐ 母の自認する態度　Ⓑ 子からみた母の態度

平均中心として，1SD の範囲を中，それ以上を上，以下を下と各程度に分類した。学年別，男女別の得点分布は第12表，一致程度は第13表の通りであった。一致程度の学年差，性差はともに有意（$x^2=1.57^{**}$，$x^2=11.298^{**}$）であった。中学生が一致度が高いが，発達的に一義的な傾向は見られない。また，女子が一致度が高い。この結果も上記各結果と同様に，一義的発達差がなく，性差が見ら

第12表　一致得点の学年別，性別分布

項目	得点	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	計	平均得点
一致	小	0	5	12	13	9	9	13	9	6	8	4	88	5.1
	中	0	3	2	9	17	21	10	10	8	6	2	88	5.4
	高	3	3	16	9	14	10	12	10	4	7	5	93	4.9
不一致	小	4	8	6	8	16	10	10	8	13	5	0	88	
	中	2	8	9	10	14	19	17	4	2	3	0	88	
	高	13	11	10	12	17	6	13	4	4	2	1	93	
無答	小	77	9	2	0	0	0	0	0	0	0	0	88	
	中	72	11	2	3	0	0	0	0	0	0	0	88	
	高	48	11	11	7	3	7	1	3	2	0	0	93	
一致	男	3	8	19	13	19	15	13	11	6	5	3	115	4.5
	女	0	3	11	18	21	25	22	18	12	16	8	154	5.6
不一致	男	4	6	8	13	15	17	24	7	13	7	1	115	
	女	15	21	17	17	32	18	16	9	6	3	0	154	
無答	男	88	16	3	2	1	4	0	0	1	0	0	115	
	女	109	15	12	8	2	3	1	3	1	0	0	154	

れることを示している。

第13表 学年別，性別一致程度（%）

	上	中	下	計
小 5	31(27)	35 (31)	34(30)	100 (88)
中 2	29(25)	55 (49)	16(14)	100 (88)
高 2	28(26)	39 (36)	33(31)	100 (93)
男	22(24)	41 (48)	37(43)	100(115)
女	35(54)	44 (68)	21(32)	100(154)
計	29(78)	43(116)	28(75)	100(269)

（ ）内は頻数

要　　約

養育態度に対する親子間の認知の差異と性格の連関的研究の一部として，10の生活領域における養育態度について質問紙法により，小，中，高校生の母親の自認する養育態度と子供の認知する親の養育態度の一致，不一致について検討し，次の結果を得た。

1) 親子間の認知の全体的な一致・不一致には一義的な発達的傾向は認められないが，低学年に比し高学年で一致の程度は高い。女子は男子に比して一致の比率が高く，10の生活領域における一致を得点化した一致程度においても高い。

2) 認知の一致群においては，認知態度は民主的態度で一致する傾向がみられる。不一致群では，母親の認知する民主的態度を子供は養育上望ましくない態度に認知する方向で不一致する傾向がみられ，この傾向は女子において顕著である。

3) 発達的に見ると，低学年では，親が自認する民主的態度をより専制的態度に認知し，またその逆に認知する傾向がみられるが，養育が行われる生活領域によって多少異なっている。

文　　献

1) Ausubel, D. P. et al : Perceived parent attitudes as determinants of childrens' ego structure. Child Developm., 25, 173-183. (1954)
2) 藤原喜悦：青年期に関する心理学的研究（野間教育研究所紀要第12輯），講談社（1956）
3) Itkin, W. : Relationships between attitudes toward parents and parents' attitudes toward children. Joul. of Genet. Psychol., 86, 339-352 (1955)
4) 中西昇他：親子関係の心理学的研究(第1報告) 本紀要，1，183-223
5) 中西昇他：非行少年の人格と家庭環境に関する研究。青少年非行に関する研究報告書（昭和34年度），大阪府青少年問題協議会. 1-27 (1960)
6) Orlansky, H. : Infant care and personality. Psychol. Bull., 46, 1-48 (1949)
7) Serot, N. M. & Teevan, R. C. : Perception of the parent-child relationship and its relation to

child adjustment. Child Developm., 32, 373-378 (1961)
8) 依田新編：家族の心理，培風館 (1961)

Summary

This study was designed to furnish informations about differences between mother's perceptinn of child rearing attitude and child's perception of expressed maternal attitude. Subjects consisted of 269 children, from 10 to 15 years of age, and their mothers. The questionnaire, mother's form and child's contained the same question in variant style, which rating maternal behavior of 10 daily life areas in four attitude types (democratic, indulgent, autocratic, laissez- faire) , used to measure perception of maternal attitude. The following results emerged.

1) No significant developmental changes were found in differences between mother's perception and child's of maternal attitude, although the differences were grater in the elder age group than in the younger age. Sex differencees in perceptions of maternal attitudes in 10 daily life areas were found. The perception of the girls, in comparison with the boys, resembles closer to that of the mother.

2) Congruences between mother's and child's perception of attitudes in 10 daily life areas braught about in a democratic attitude. The discrepances in perceptions were found in the way in which child perceived mother's desirable attitude as a undesirable one. Such discrepances occurred in both sexes but the tendency was grater in the girls.

3) Developmentally, the younger group tend to perceiving mother's democratic attitude as the autocratic and *vice versa*, while this tendency varied partially in each of 10 behavioral areas of daily life.